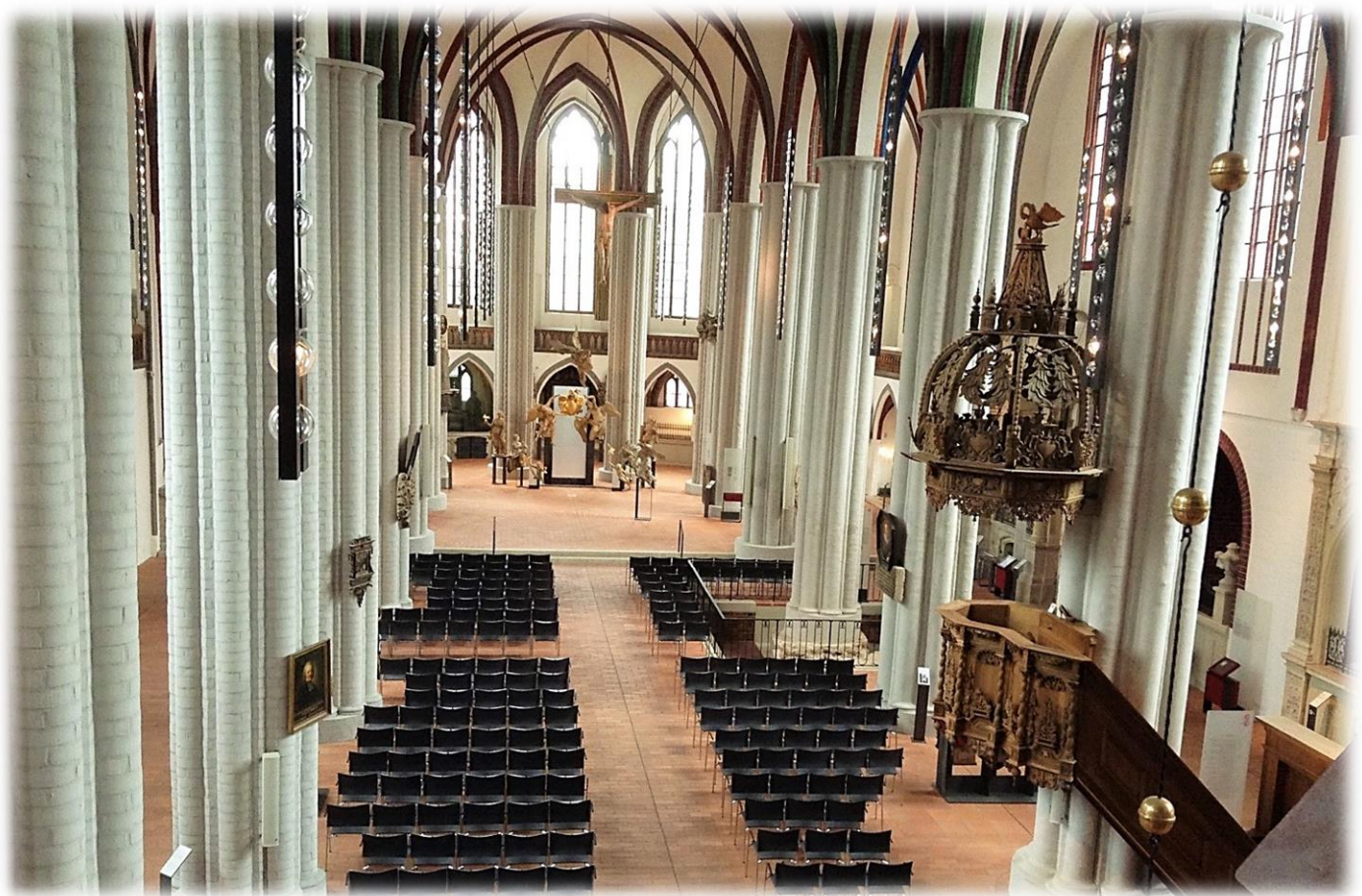




ベルリン最古の教会、ニコライ教会（1230-1250 建築）の礼拝堂。ここで「血潮したたる」の作詩者パウル・ゲルハルトが、1657 年から 1667 年まで牧師を務めた。パウル・ゲルハルトに関しては、ニュースレター61 号 http://www.akworship.com/pdf/newsletter_61.pdf をお読みください。

Atsuko Kudo Mail Magazine 220

2016.07.15 ●Berlin

お元気でいらっしゃいますか？

ハンブルクは、このところ、青空と曇りと雨が数十分ごとに変化する日々が続き、気温も 20 度以下ですが、家で仕事をするには最適の環境です。

7 月 8 日（金）～10 日（日）の、ベルリンでのメッセージと賛美奉仕の報告をさせていただきます。

● 8つの十字架の身代わりのみわざ：7/8 金

7 月 8 日（金）、ベルリン在住の二宮美香子さん（写真：前列左から 2 人目）が、8 年前からご自宅で始められた金曜夜の日本語家庭集会にて、「8つの十字架の身代わりのみわざ」についてお話しさせていただきました。私を含めて 11 名の参加者でした。



イエス様の、8つの「十字架の身代わりのみわざ」のうち、2つは、ニュースレター61号にも紹介させていただきました。今回、メッセージの準備のために、8つの身代わりのみわざのすべてを原稿にすることで、私たちが神からいただいた祝福のすべてがここにあり、すべてが十字架によって完成されたこと、十字架以外に私たちに必要なものは何もないことを、深い感謝とともに、改めて認識させられました。

「キリストは聖なるものとされる人々を、一つのささげ物によって、永遠に全うされた（完全にされた）のです。」（ヘブル 10:14）

集会には求道中の方も来られ、これまで疑問に思っていたいくつかのこともクリアーになったようです。その方が一日も早くイエスを救い主として心にお迎えできますようお祈りください。

●言葉によるコミュニケーション・言葉なしのコミュニケーション：7/9 土

テンペルホーフ自由福音教会は、二宮美香子さんら、数名の日本人が集っているドイツ人教会です。9日（土）の朝、伝道のために教会が企画した婦人朝食会には、100人以上の婦人が集まりました。

朝食をいただいた後、講師のアンネローレ・シュミット女史が、『言葉によるコミュニケーション、言葉なしのコミュニケーション』についてお話をされました。

特に新鮮だったのが、コミュニケーションは、7%が言葉、38%が声（大きさ、響き、トーン）、55%が表情、ジェスチャー（体の表現）、つまり93%が、言葉以外によるものだったということです。つまり、内側の思いは、言葉以上に、声と表情、ジェスチャーに出るということです。



この朝食会で驚いたのは、美香子さんが誘った隣人・友人（ドイツ人）が6人も来られたことです。彼女は、日本人のために、教会の一室で学び会（B3 集会）を企画し、ご自宅でも、毎週のように聖書の学び会を開いています。その際には、おいしいお食事を作って、参加者をもてなしておられます。そして、この集会から、これまで4人の日本人が信仰に導かれ、テンペルホーフ教会のニッツ牧師から洗礼を受けました。



美香子さんは、このように日本人伝道に身を捧げながら、かつ、ドイツ人とも親しくされ、その方々にも伝道されているのです。私より8歳上の美香子さんの、お元気に喜んで主に仕えておられるお姿に、私も大いに励まされました。どう

ぞ、美香子さんの伝道の働き、日本語集会、テンペルホーフ教会の祝福ためにお祈りください。（写真：朝食会に参加された美香子さんの友人らと）

●よき力に守られて：7/10 日

日曜日、テンペルホーフ教会の礼拝の最後に、ディートリッヒ・ボンヘッファーの「よき力に守られて」を、ドイツ語で特別賛美させていただきました。

「よき力に守られて」は、ナチスによって絞首刑に処されたボンヘッファー師が収容所最後のクリスマスに、婚約者マリアとその家族に送った詩ですが、久しぶりのドイツ語での賛美を準備に、ボンヘッファーの生涯を思いめぐらしながら、詩のひとつひとつの言葉をかみしめつつ練習していると、涙が溢れて、途中で歌えなくなることが度々ありました。



私のその思いが皆さんに伝わったのか、聖霊が触れてくださったのか、多くの皆さんが涙されていました。賛美する私自身も、テンペルホーフ教会の皆さんと御霊にあって一つとされながら、どのような苦しみの時にも共にいて、愛の御腕に抱いてくださる主の愛を深く感じた、幸いなひとときでありました。

たとい主から差し出される 杯は苦くとも 恐れず感謝を込めて 愛する手から受けよう
よき力に守られつつ 来たるべき時を待とう 夜も朝もいつも神は われらと共にいます

～「よき力に守られて」3 番～

●ベルリンの壁



日曜日、ハンブルクに帰る前に、チェック・ポイント・チャーリー（旧・国境検問所）そばにある『壁博物館』に立ち寄りました。ここには、ベルリンの壁の歴史が詳しく展示されています。

東ベルリンの経済格差や政治体制に不満を覚え、西ベルリンへ脱出する人々が増加する中、このままでは、国家存続の危機に陥ると判断した東ドイツ政府は、1961 年 8 月 13 日、ベルリンに、東西を分ける壁を建てました。

しかし、東側の人々の中には、命がけで西へ脱出する人もいました。壁を乗り越え、湖を渡り、トランクの中に身を隠し、トンネルを掘り、気球に乗り・・・そうやって、うまく西側に渡れた人もいますが、見つかって射殺、あるいは事故で命を落とした人は、136 人に及びます。

1989 年 11 月 9 日、ついに東ドイツが旅券の自由化を承認、歓喜したベルリン市民は、検問所に押し寄せ、壁を崩壊しました。

その陰には、教会の祈りがありました。1981年、ライプツィヒのニコライ教会のクリスティアン・フューラー牧師によって始められた若者たちによる月曜祈り会（平和への祈り）は、月曜デモへと拡大して行きました。1989年10月9日には、7万人に及ぶ市民が手に火をともした蠟燭を掲げて（武器を持っていない印として）デモに参加し、このデモによって平和革命への火ぶたが切られたのです。

しかし、教会が共産主義に対して戦いを始めたのは、ニコライ教会からではありません。



ツァイツの教会の牧師であったオスカー・ブリューゼヴィッツ（写真）は、秘密警察の監視下に置かれながらも、神を否定する共産主義のイデオロギーが、特に若者の精神を殺してしまうことに真っ向から抗議しました。そして、1976年8月18日、彼は、「東ドイツの教会は、共産主義を非難する。学童と若者たちに与える圧力に対して」という看板を掲げ、ガソリンをその身にかぶって火をつけ、教区長のドアに向かって走り込んだのです。

彼の焼身自殺は、今も論争的になっています。しかし、それまで口を閉ざしていた東ドイツの教会は、この事件を境に口を開き始めます。そして、殉教や投獄を恐れずに反共産主義の声を発する牧師が起こされ、ライプツィヒを始め、東ドイツ各地の教会で祈りが積まれて行くようになりました。そして、ついに、エリコの城壁が崩れた時のように、武器を使うことなしに、ベルリンの壁は崩れ落ちたのでした。

~~~~~

## ●お祈りください

☛ 7月27日～31日、ザーベルシュタイン（シュヴァルツヴァルト）で、『第33回ヨーロッパ・キリスト者の集い』が開催されます。今年も、賛美チームの一員として、土曜の「賛美の夕べ」で奉仕をいたします。今年のテーマは「御国を待ち望む」です。主が大会を守り祝福してくださいますように。

☛ 9月のブラジル、10月からの日本でのコンサートのためにも準備を進めています。祈りと聖霊の導きの中で準備をすることができますように。

☛ さまざまな準備で大変忙しくなりましたが、多くの祈祷課題があり、もっと祈る必要を覚えています。忙しさに巻き込まれず、できる限りの時間を祈りに充てることができますように。

イエス・キリストの恵みが、  
皆さまと共にありますように！

Atsuko Kudo

